

「大学合格電報」

コロナ禍の酷暑の中、全国の高3生は大学受験に向けて日々机に向かっている。無論、我が豊翔の生徒も「合格」を手にするべく奮闘している。

合格を目にする瞬間が、大学の掲示板に張り出される受験番号を探した時代から、ネットによって瞬時に結果を知る形に代変わっても、「合格」の二文字を目にする喜びは、本人も保護者も我々職員も切なる願いであることは変わらない。

私の大学受験の合格発表は、50年を過ぎた今でも鮮明である。

当時故郷（京都）を離れていたいと考えていた私は地方（鳥取）の大学を受験した。今なら遠方でも海外の大学でも、ネットで直ぐに合否判定が確認できるが、当時はそんなものはまだない時代。校内に貼りだされた大きな紙に、自分の受験番号を探すスタイルが主流であった。

当時の私には、合否を確認するためだけに鳥取へ行く旅費を工面できなかった。私のような受験生には、地元の大学生が合否を確認して電報で知らせてくれる有料サービスが存在していた。届いた電文は「鳥取砂丘は嵐」であった。砂丘は嵐で踏み入ることができない、つまり不合格。三重県の大学を受験した友人には「伊勢湾は闇」。北海道の大学を受験した友人には、「時計台は春を呼ぶ」であった。どれも面白い電文だが、意味の違いは歴然で、私と友人は浪人を覚悟して予備校に入学を申込んだ。

その後、富士山が見える静岡の大学を受験した私に届いた電報は、「富士は招く」であった。「伊勢湾は闇」を受け取った友人には、「雪解けの信濃路」という信州の大学から祝砲が届いた。私と友人は予備校に誇らしげに入学キャンセルの連絡を入れた。

私の大学生活は富士山とともにあった。校舎の屋上から雄大なそれぞれの四季の富士山を眺めたものだ。冬には3泊4日の富士五湖一周単独サイクリングに挑戦した。ところが京都出身の私は、冬の富士五湖は路面凍結で自転車での走行が如何に危険であるかを知らず、怪我だらけで静岡市にもどってきた。そんな無謀なチャレンジをしたのに、なぜか富士登山に挑むことはなかった。「富士は招く」から始まった4年間の大学生活、富士山に招いてもらったのに登山をせずに終えてしまったことは、今も後悔として残っている。

小林学院長は、豊翔高等学院で富士登山イベントをしたいと言っていた。もう私にその体力はない！

（丹羽 豊）